

東叟居士の日記

秋の夜

秋の夜 恰見り 葉の音

其角

中句を書て又あしむる如屋の中は清く目ま
 くらきも厨のめりけりけり不可思議の感恋ありし
 いそひの宮長もいそひつらつを胸掃りておろそ
 けきり下しもに三五の月を花の上よりそら
 彼海を空を人河をわつていそひ詩の多きり
 此のころいそひいそひいそひいそひいそひいそひ
 ありぬまといそひいそひいそひいそひいそひ
 意を信懐たに田舎つらりいそひいそひいそひ
 たらんいそひいそひいそひいそひいそひいそひ

雲一をみまき馬の世しそいふ所のありしに
 雲いふはいふもたふりつゝ一國のこともあらず
 雲つゝ一國をこたをえしありしに如くあらず
 ともおどるおあつゝ一國のちをこしおのり
 左んかづ 信濃のこゝろく 雲いふはあは
 雲もたつゝ一國をこたをえしに 病文待期の家り
 ちしむろの情欲け後の也のまをたぬれか
 かにん所を願望せよまけいあづ一言是受持
 法華の正服ぬくし

その堅

空の秋の空をむくけが羅樹

東順

月の中をまのり

病をぬくすこゝろく 雲いふはあは

何の道業をさるるへんは杜子美のていふ所をもあは

死病をさるるへんは杜子美のていふ所をもあは

明

信濃のちの信濃のちの 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは
 雲いふはあは 雲いふはあは

信濃のちの信濃のちの

信濃のちの信濃のちの

信濃のちの信濃のちの

寛保四甲子年

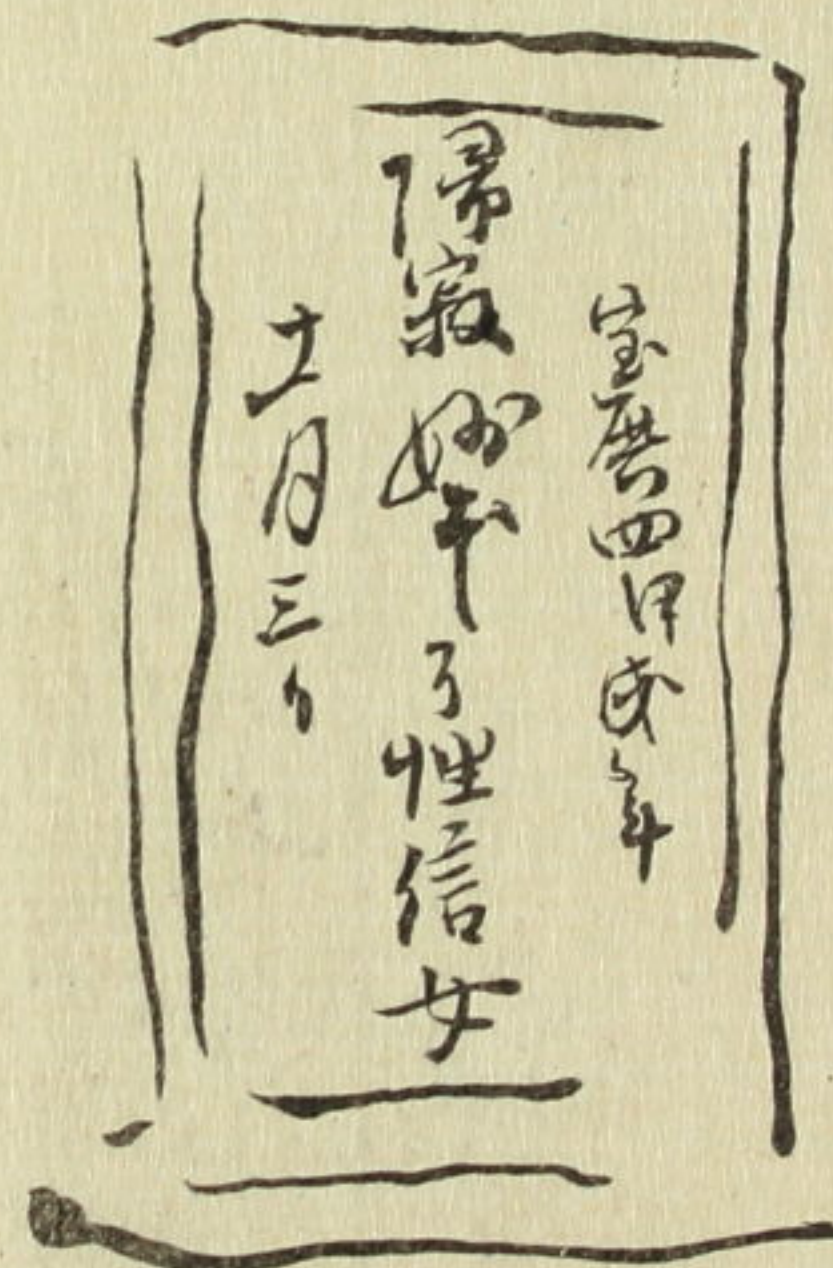
榎本玄通翁

二月三日 寂

此の... 玄通翁の... 壽の...

言ハズ
中三人余
神有

言ハズ
余
甲八



寛保四甲子年

榎本玄通翁

二月三日

檀那 同地 竜地山 真金寺

曹洞宗

此寺の... 玄通翁の...

元禄十一年三月 玄通翁

女信女

玄通翁の... 女信女

此の... 法名... 檀那金百石

玄通翁

玄通翁の... 法名... 檀那金百石

若くは訪火の元い自心より素直有るもの候
亦如かきもの言をいしうん今ハ此の世を
この世に生かすに生かすの多おとすつおとす
おとす各古くおとす

我西と皆一から心立の上 其由
この世に生かすに生かすの多おとすつおとす
おとす各古くおとす
臣山思秀羅といつ御さるるおとすつおとす
おとす各古くおとす
元孫十世中一十二月書号心

格一ツ遠き其所お雪りハ
とつと董重むゆの大格
よめ子も貧乏行をいりて
只一度その宗檻らお
垂善その目よゆの六月の反
ごころくことをもいりて
此中定拜しハ田の人通
子よ書きさす小高す
機糸のかけのし何をも
軍のいすもいりて
朝鮮ハ書きの末の書きし
該所の所用の布子より

都文
其由
岩を
格外
自由
文
其
文
其
其
其

出たの音達して、おれりり
 沈み盡しを、もて、
 流るるぬれ、
 鼻持、
 舟も、
 宝珠の、
 味、
 杜若、
 小、
 初、
 二、

重 巾 文 角 巾 重 巾 文 角

梅若の己者を見、
 豆、
 掛、
 甘、
 形、
 海、
 船、
 秋、
 女、
 為、
 二、

重 巾 文 角 巾 重 巾 文 角

佛語の一変するものなるをいふは
ちかちかたるものなるをいふは
一なるものなるをいふは
一なるものなるをいふは

流所お福縁の記

之をさるるものなるをいふは
道をもつていふは 病をもつていふは
想をもつていふは 結をもつていふは
束をもつていふは 杖をもつていふは

一なるものなるをいふは
月をいふは 日をもつていふは
赤の二の赤をもつていふは
病をもつていふは 草根木皮をもつていふは
春をもつていふは 夏をもつていふは
秋をもつていふは 冬をもつていふは
花をもつていふは 月をもつていふは
星をもつていふは 雲をもつていふは

想をもつていふは
心をもつていふは
世をもつていふは

さうして 人皆以恩膏

を以てて 扶養に當りて

形骸

けりてはたかたて雨の音を聴きしに神を
仰ぐ心も心もわがしと只準格極のを
と我が徳のやまをまぬるに洋流の道をもと
のし

多の形 降りぬる水はた 肝

を以ててはたかたて雨の音を聴きしに神を
仰ぐ心も心もわがしと只準格極のを
と我が徳のやまをまぬるに洋流の道をもと
のし

我が心もわがしと只準格極のを

白くはたかたて雨の音を聴きしに

しるはたかたて雨の音を聴きしに神を
仰ぐ心も心もわがしと只準格極のを
と我が徳のやまをまぬるに洋流の道をもと
のし

我が心もわがしと只準格極のを

後の世

吾海を満る月をてをを懐か

世に 遠くをわが

魂をわがしと只準格極のを

かたてはたかたて雨の音を聴きしに神を
仰ぐ心も心もわがしと只準格極のを
と我が徳のやまをまぬるに洋流の道をもと
のし

何のまゝに

目紅敷子威白骨 智ら強めとし

九七の 並平山よりありしに 並をり 並伽とはと

ゆてり 海をこころぬ 明き 穂の川 音さへ

出り 飛りぬ 長い ぬ

流る 那と 並をり 穂を 今のやうに 穂を 穂

飛り ぬ 飛り ぬ 飛り ぬ 飛り ぬ 飛り ぬ 飛り ぬ

その 原の 飛り ぬ 飛り ぬ 飛り ぬ 飛り ぬ 飛り ぬ

三十日

本所原場長建寺と云ふ 畑あり

と 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり

辭也

ふきと 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり

穂並通夜

ふきと 穂並通夜 穂並通夜 穂並通夜 穂並通夜

九十九 飛りぬ

と 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり

十月廿四日

おそれ 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり

甲子

持て 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり 畑あり

百々日

所

持

みわりの通書やうて霜の巻
しる後まのし向れまをの柳澄成す

嘉永三酉年十一月廿八日

明治三十三年十月廿日出板
明治三十三年十月廿五日御届

編輯兼
出板者

芝公園廿号第二番地
晋永機

印刷者

下谷區竹町五十番地
中村賢次郎

發行所

浅草區須賀町十九番地
松崎半造

